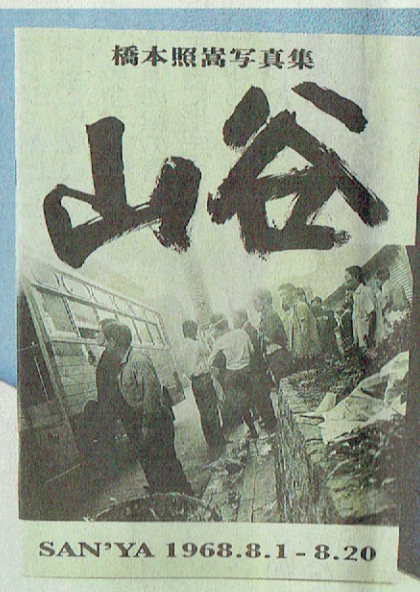


石巻出身 橋本さん 29歳の時、撮影 「山谷(ドヤ街)」写真集になる 六本木のギャラリーで作品展



橋本さんによる写真集「山谷」表紙

石巻市出身の写真家・橋本照嵩さん(77)「さいたま市」が、写真集「山谷」を禅フォトギャラリー(東京・六本木)から出版した。台東区の北部にあった通称「ドヤ街」。この寄せ場に集まってきた日雇い労働者たちを、1968年8月、当時29歳だった橋本さんが20日間かけて撮影した。モノクロの写真集は、約50年



なぜ今、山谷なのか。禅フォトギャラリーのオーナー、マーク・ピアソンさんは「東京、横浜、大阪などは「東京の日本の大都市は、20世紀の日本の大都市は、その移住者たちの最終地点が山谷。『ドヤ』と呼ばれた安宿が多くあり、移住者たちは、そこに泊まり込み、日雇い労働者になつて1日1日を暮らした。橋本さん自身、山谷に住み、日雇い労働を経験したという。」

「その後、彼らの写真を撮りたくなった。賭け事にたむろするところ、札を切つて人を雇うところ、立ち飲み屋に寄るところなど。だが、撮影は難しかった。彼らは他人の介入を嫌うからだ」

盗み撮りも

最終手段として、紙の手提げ袋に穴を開けて、レンズを出して「盗み撮り」した。その結果、労働現場までのバスに乗り込む男たちの列、タバコをくわえた男の顔のアップ、路上でスイカを丸かじりする者たち、街を闊歩する男たちと、山

谷の世界を、ざらつとした空気の中に捉えた。橋本さんのカメラは「ミノーベ知事はわれわれと話し合え」と書いたプラカードを持った、鉢巻をした男の後姿も収めていた。美濃部都政時代に発生した山谷騒動。不安な社会の空気を切り取っていた。



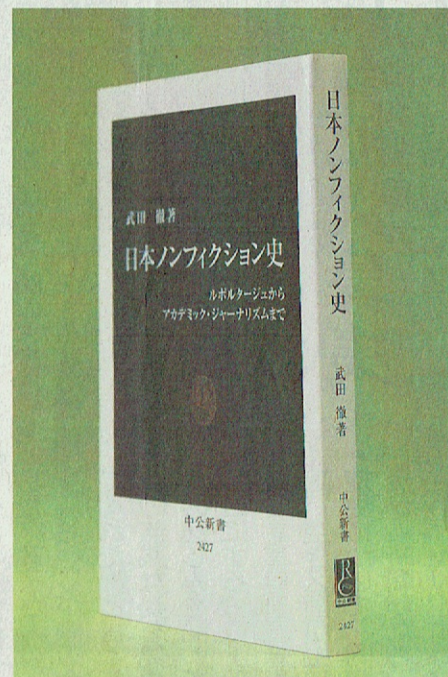
写真展「ドヤ街 DOY AGA」は17日まで。「続・ドヤ街」は9月15日〜10月7日。開館時間は正午〜午後7時。休館日は日、月曜と祝日。連絡先は03(6804)1708。

本の愉しみ

優れたノンフィクションはときに時代を超える。そうか、世の中にはこんな物語があったのか、と教えてくれる。読む者の世界観を一変させてくれることもある。

たとえば、30年以上も前に読んだ大泉実成著『説得』。エホバの証人を信仰する両親が、交通事故に遭った息子への輸血を信仰上の理由で拒否する。少年は「生きたい」との言葉を残し死んだ。著者はエホバの証人に入り込み、執拗に関係者を追う。なぜ少年

7年を要した労作



武田徹著「日本ノンフィクション史」

は死ななくてはならなかったのか。その問い掛けは今でも重く響く。たとえば、社会党委員長・浅沼稻次郎の刺殺事件を描いた

た沢木耕太郎著『テロルの決算』。17歳の右翼少年がなぜ、テロに走ったのか。著者は少年の内面を丁寧に描きながら、テロへ至ったプロセスを

つまびらかにする。数々のノンフィクションに影響を受けてきたが、その分野の歴史を意識することはなかった。「日本文学史」の本

ジユ、週刊誌ジャーナリズム…。それらが生み出された状況や思想的背景を踏まえ、歴史を通観していく。

はあるけれど、ノンフィクション史はあまり聞かない。その歴史を探究したのが、『日本ノンフィクション史』ルポルタージュからアカデミック・ジャーナリズムまで(中公新書、880円十税)。著者は書き上げるのに7年を要したという。労作だ。第2次世界大戦中の記録文学、戦後の社会派ルポルタ

(古)